

## 二匹のイワナが棲む流れ

★福井県 九頭龍川水系 足羽川上流域  
☆足羽川本流・魚見川・水海川・部子川

「このあたり記憶あるなあ」

「月ヶ瀬やて・・・」

「どうやー思い出した。ここまっすぐ行った  
ら大堰堤やー」

記憶に残る川沿いの道を、鮮明に蘇る「良い  
釣り」に想いを馳せて・・・約二十年前ぶりに見る  
その川は、惹きつけられる様な溪相で我々を導  
いてくれた。



ダムの中クラマス狙いの惨敗に嫌気がさして  
何時しかルアーを投げるポイントも大瀬や大淵  
になり溪谷へと向かい始めた頃、ルアーではど  
うにもならないポイントを攻めたくてフライの  
道具を買った。

しかし、当時のエサ釣りの情報で川に赴いて  
もイメージする溪とは程遠く、何処に行けば自  
分が満足できるのか悶々としていた頃である。

その頃「関西の釣り」と言う雑誌の中でひと  
きわ目を惹く記事があった。カラーで数頁の釣  
行記・・・記者はルアーマンなら今では誰でもが  
ご存知の下野正希氏である。毎回フライやルア  
ーで魚を釣り、写真に映る景観も非常に美しく、

非常に完成された記事  
だった。その中にフライ  
で釣りに行ったがリー  
ルを忘れて仕方なくス  
ピナーでイワナを上げ  
る下野氏が映っていた。  
「ニニやーニニなら  
でカンゾー・・・きつと・・・」  
雑誌に書かれた「月ヶ  
瀬」「冠山」「大堰堤」を  
目印に仲間を誘って出  
かけたのは言うまでも  
ない。



「月ヶ瀬・・・ニニ  
や、ここまっす  
く冠山に向かっ  
て養魚場の上に  
ある大堰堤やー  
そこがこの本の  
写真の所やー」  
程なく行くと養  
魚場があり、その上  
手に大堰堤が現れ  
た。

足羽川・・・そ  
れから暫くはこの  
水系のイワナに狂  
わされてしまった。  
本流・魚見川・  
部子川・水海川・・・

何処でやっても関西圏(当時は兵庫県が多か  
った)のでその影響もあるが・・・では比較にな  
らないイワナが釣れた。虹鱒も腹が黄色くなっ  
た準天然が高々とジャンプを披露してくれた。

唯一、何時も気になっていたのは漸くフライが  
わかり始めた駆け出しの頃にも係わらず、ここ  
に行くといついついルアーに手が出てしまうこと  
だった。当然、ポイントが広く大きく豊富にあ  
り、魚がスしていない当時の状況では、大型を  
効率よく引き釣り出すのはやはりルアーだった。

スピナーはドロップペン、スプーンならトビー、これに尺近くのイワナが狂った様に襲い掛かってきた。大淵でルアーを引くとそれこそ涌く様に十数匹が追いかけ始め、中でも大型がダッシュしてヒットする。もう、ポイントに立つ度にワクワクする状況だった。

フライではサイズは一回り小さくなるものの、それでも20センチ越えのイワナの数釣りを楽しめ、腰まで立ち込むと、自分の視線より高々とジャンプする虹鱒が私を虜にしたの言うまでもない。

日頃は釣れずに諦めてる下手糞の私でも、ここに行けば本当に「良い釣り」が堪能できた。

二匹のイワナが棲む流れ……

「逃がした魚は大きい」と言うが、未だに二匹のイワナが私の記憶の片隅で日々を重ねる毎に巨大化している。

一匹は水海川の堰堤でトビーにヒットした奴、コイツはどうとう魚体は確認できなかったが、5分を超える格闘の末、フックが伸ばされて戻ってきた。

もう一匹は魚見川の小さな流れでブラウンパラシュートに出たイワナ……出た途端に雷魚と見間違え程の恐ろしい魚体で当時1号ハリスを使用していた為、細い流れを走りまわられた挙句、岩にもぐらわれて切られた。

その後、約20数年……それなりに尺物も釣らしてもらったし逃がしもしたが、この二匹を超える魚には未だ出会ったことがない。やはり逃がした魚は本当に大きい。

やがて結婚と共に足羽通いもこれが最後と決めた釣行で出発寸前に（いつまでも二刀流で釣ってたなら、いつまで経ってもフライもルアーも中途半端や……）と、ルアーの道具を玄関に置き、それからフライ一辺倒になっている。

（……久しぶりにルアー持って来たら良かったなあ……）と、昔の想いに耽っている……

「おい……行き過ぎたんちゃうか？」

「養魚場あったけど、大堰堤ないなあ」

「こんなに距離なかったぞ……直ぐ上やったと思うでえ」

車をリターンして探すが、それらしい養魚場は見つかるもの、大堰堤がない。

仕方なく車を降りて散策すると、目の前の流れの対岸に広がる雑木林が大堰堤がそのものだった。

二十年の月日が……あの大きな堰堤を埋めてしまった。

その時は野宿して二日間、想い出深いあちこちを釣り歩いたが、堰堤を埋めた月日は、我々の夢と期待をも埋め尽くし、貧果惨敗に終わった釣旅の帰路は皆それぞれに無口だった。



## ■足羽川上流域の二案内

「二案内が出来た程、今となってはわかっていない。ただ、何処にでもある「昔は良かった」と言うボヤキだけである。」

2002年5月のGW・・・誰からともなく「久しぶりに・・・」と想いを馳せて一泊野宿でかけたものの、二日間一本流にて15センチのイワナ一匹、水海川で20センチのあまご一匹、部子川で13センチのヤマメ一匹と貧果に喘いで帰ってきた。

しかし、「何ぼなんでも・・・こん畜生！・・・」と翌年のGWに例の養魚場に予約を入れて二泊で勇んで出かけた。(もう、野宿の厳しさが釣りの集中力を維持出来ない・・・)

しかし、やはり期待に反して、本流、魚見川、そして水海川と全く昔の面影はなかった。当時から部子川だけはそれなりに釣り人も居たせい、か、まあ・・・若干まし・・・と言う程度だった。

本流では虹鱒も釣れたが、これも昔の準天然とは程遠く、ジャンプもせずに足元で横たわり、忘れぬ二匹のイワナを逃がした魚見はコンクリートで護岸され、水海も堰堤が埋まって魚影すら確認できずに最終口を迎えた。

「堰堤の少ない支流に入るしかないのぢやうか？・・・こんなけ埋まったら、ポイント

変えなしようがないでえ」・・・、最後

日は昔の良し想いを断ち切り、その昔は見向き

もしなかった支流に入った。

100メートルの区間で一時間半の釣り・・・昔の様なサイズではないが、20センチ前後のイワナが二十数匹、ほぼ入れ食いの状態で釣れてくれた。

全てドライでバツリ出る。これには消沈していた気分も高揚し、それからも適度に釣れ続け・・・小さな支流の溪に笑い声が響き渡ったのは言うまでもない。

しかし、「ここも何時しか「昔は良かった」と言う事になるかなあ・・・」逃がした二匹のイワナが棲む流れが、記憶の奥底に流れている様に・・・

この溪もどうか何時までもこのままであってほしいと願い、それ以降は心の奥に仕舞い込んでずっとそのままにしてある。

2007年 1月

